

## 〔その他〕

### 新自由主義下の教育実践における教師の教育観と専門性の再考

關 秀隆（東京大学教育学研究科修士課程）

#### 1.はじめに:新自由主義的潮流に抗する教師の専門性

現代の教育は、グローバル化の進展と情報技術の発展という二つの大きな波に晒されている。この潮流の中で、成果主義や効率性を追求する新自由主義の価値観が教育領域に深く浸透し、教育改革を駆動する主要なイデオロギーとなりつつある。高田（2024）は、新自由主義を「福祉国家の非効率性を批判し、自由な市場における競争を重視し、小さな政府を目指す立場」と説明している。また、佐藤（2025）が指摘するように、この新自由主義的価値観が教育を「公的責任」から「個人の選択と自己責任」へと転換させてきた。つまり、教育が本来もつ公共的・倫理的な性格が、サービスとしての商品化の論理に置き換えられつつあるのである。こうした価値観のもとでは、教育は経済合理性の枠内で捉えられやすくなり、教育の成果を数値化し、教師や学校のパフォーマンスを市場的に評価する仕組みが拡大する傾向にある。特に、EdTechに代表される「教育のデジタル化」は、一見中立的な技術革新に見えながら、この新自由主義的な価値観を学校現場に巧みに浸透させる「ソフトパワー」として機能している（Kerssens, 2024）。これは、力づくではなく、「より良い教育のために」「子どものため」という優しい語りかけを通して、学校現場を自社のエコシステムの中に取り込むことで、教育の本質を歪めかねない危険性を孕んでいる。

本稿は、この新自由主義的な潮流とそれに伴う「ソフトパワー」に対し、教師の専門性がどのように教育の本質的な価値を再構築しうるかを探究するものである。具体的には、この潮流がもたらす「正解主義」の教室が、子どもたちの学習からいかに内面的な豊かさを奪うかを論じる。そして、この状況を乗り越えるための教師の専門性として、授業における出来事を深く「見る」力である「教育的鑑識眼」、子ども一人ひとりの声なき声に耳を傾け、その存在を擁護する「アドボカシー」、そして、教師と子どもの関係性を変革する「学びのコーディネーター」という三つの概念の重要性を提示する。本稿は、外部から押し付けられる画一的な価値観に安易に流されることなく、子どもたちの多様な学びを真に支援する教師の専門性についての一つの道筋を示すことを目的とする。

#### 2. 新自由主義下の「教育観」の変容:政策とテクノロジーの影響

新自由主義的な価値観が日本の教育に浸透したのは、1980年代半ば以降、特に小泉政権から安倍政権にかけての教育政策と深く結びついている。この時期、教育基本法の改正（2006年）や、分権改革と規制緩和が推進され、教育の制度的、財政的基盤が解体されていった。

こうした政策の方向性は、佐藤（2025）が述べるように、教育を「公的責任」から「個人の選択と自己責任」へと転換する新自由主義的価値観と軌を一にしている。その結果、教育制度は徐々に市場原理に晒され、学校間の競争が常態化していった。このような環境の変化は、教師の教育観や実践にも少なからぬ影響を及ぼしていると考えられる。

高田（2024）は、大阪における新自由主義的な教育改革がこの潮流を最も先鋭的に示していると述べている。大阪では、学力テストの結果を競争的に用いることで、学校や教員を厳しく評価し、政治主導の教育政策が推進された。このような環境下では、教師は個々の教育観に基づいた自由な授業実践よりも、成果を速やかに示すことを求める外部の圧力に晒されやすくなるだろう。

さらに、この潮流は、コロナのパンデミック以降、文部科学省が推進した GIGA スクール構想や、経済産業省による EdTech（Education × Technology）推進の取り組み、すなわち「未来の教室」プロジェクトによって加速されている。EdTech とは、AI やビッグデータなどのテクノロジーを教育の領域に導入しようとする試みの総称である。こうした動きは、「未来の教室」の柱の一つである「学びの自立化・個別最適化」（経済産業省、2019）にも示されるように、学習の個別最適化や効率化を目指す方向で語られることが多い。しかし佐藤（2021）は、経済産業省の「未来の教室」構想が掲げる「個別最適化」は、海外諸国のようなビッグデータや AI 制御を伴う高度な学習モデルとは異なり、実際にはプログラム学習や完全習得学習の域を出ていないと批判している。つまり、日本における EdTech の導入は、必ずしも新しい学びのパラダイムを開くものではなく、従来の効率主義的な学習観を強化する側面も併せ持っているのである。

筆者は、このアプローチが過度に進行すると、学びはしばしばドリル学習のようなものに傾倒してしまうと危惧している。ドリル学習は、反復によって知識を定着させることには有効である一方で、なぜ学ぶのかという問いや、知識が持つ文脈的な意味を思考する機会を子どもから奪ってしまう。これにより、学びは知識のインプットとアウトプットという効率的なプロセスに還元され、教育は知識偏重に陥る可能性が高まる。しかも、そのようにして獲得された知識は、AI の発展によって、子どもが大人になる頃にはその多くが陳腐化し、価値のないものになっている可能性も考えられはしないだろうか。

ICT をはじめとするテクノロジーは教師の教育観そのものにも深く影響を及ぼし、「良い実践」に対する考え方を変容させている。例えば、デジタルプラットフォームが学習データの収集・分析を可能にすると、生徒・児童の学力向上に貢献した教師がデータによって可視化される。この結果、「学力を向上させられた教師＝良い先生」という評価軸が形成されやすくなる（Sellar, 2014; Manolev et. al., 2024）。この新しい評価軸は、教師が自身の教育観を、子どもとの深い対話や非認知能力の育成といった、データ化しにくい実践から、客観的な数値成果に直結するような指導法へと再構築することを暗黙のうちに要求する。このような状況は、教師が自らの教育観を自覚的に省察し、問い直すことが、教育の本質を見失わないための第一歩となることを強く示唆している。

### 3. 正解主義の教室と独りになる子どもたち

新自由主義の潮流のもとでは、教師はテストの点数を上げるための授業を目指し、学力向上を目的としたカリキュラムを構成する傾向にあるだろう。こうした状況では、多くの教師が無意識のうちに、知識の効率的な伝達を重視する教育観に囚われてしまうことがある。

「教える専門家」としての教師主導の一斉授業である（佐藤，2023）。

なお、「正解主義」や「教師主導の一斉授業」は、新自由主義に固有の現象ではなく、従来の知識伝達型の教育にも見られた傾向である。しかし、学力の数値化や成果主義的な教育改革によって、こうした傾向が強化され、学びの内面的な豊かさが一層失われている点に、新自由主義的教育の深刻な問題がある。Noula & Govaris (2018) はこれを「疎外(alienation)」という概念で論じている。

このような環境のもとでは、子どもたちは常に「正しい」答えを速やかに導き出すことを求められ、評価の基準も「できる・できない」「良い・悪い」という二項対立的なものに収斂されていくのである。そして、この正解主義が支配的な教室では、子どもたちは「わからない」という思考のプロセスそのものを表出できなくなる。「わからない」と言うことは、自らの能力不足を露呈することに繋がり、それは教室の評価システムにおいて「劣っている」と見なされる恐怖を子どもたちに与えてしまうだろう。

佐藤(1996)は、教室での学習を、以下の三つの実践が相互に絡み合う複雑なプロセスとして捉えている。すなわち①認知的・文化的実践：学習内容を知識として認知し、対象と自分自身、未知の世界と既知の世界を構成していく実践。②社会的・政治的実践：教師や友人といった他者との対人的・社会的なコミュニケーションを通して学習が遂行される実践。③倫理的・実存的実践：学習者が学習内容や他者と向き合うだけでなく、絶えず自分とも向き合い、自己の存在証明と態度表明を行う実践、である。

しかし、教師主導の一斉授業では、知識の伝達、すなわち認知的・文化的実践に偏りがちである。教師からの「説明」という一方向の授業によって、本来、対人的・社会的なコミュニケーションを通じて遂行されるべき社会的・政治的実践が阻害される。

この正解主義と知識偏重の帰結は、子どもたちの内面にも深刻な影響を及ぼすのではない。「良い子」であること、あるいは「できる子」であることを求められる中で、彼らは自らの感情や問いを抑圧するようになるかもしれない。教師や周囲の目を気にして、不安や戸惑いを心の中に閉じ込めてしまい、本質的な学びの喜びや他者とのつながりを見失ってしまうかもしれない。教室という本来、「わからない」を分かち合うべき場が、子どもたちが孤立し、感情や思考を表現することをためらう場へと変容していくのである。これは、学習者が自己の存在証明と態度表明を行う倫理的・実存的実践を喪失する危機を意味している。自己の存在証明を喪失した子どもは、自分自身を見失う危険に直面し、最終的には不登校という形で、学びの場からの離脱を選択する可能性すらあるのである。

### 4. 新自由主義的潮流に抗する教師の専門性：「教育的鑑識眼」と「アドボカシー」

新自由主義的な教育が客観的な成果データや、画一的な評価システムを重視する一方で、

教育の本質的な価値は、そうしたデータには現れない、授業という複雑で予測不可能な出来事の中に宿っているだろう。この潮流に抗うため、教師は自身の専門性を変革し、子どもたちを「見る」力を磨く必要がある。この「見る」力とは、アイスナーが提唱した「教育的鑑識眼」に他ならない（アイスナー, 2024）。

「教育的鑑識眼」とは、教師が授業という出来事の微細なニュアンスや、子どもの内面的なプロセスを深く看取する能力である。それは、教師に質的研究者のような視点をもたらし、数字や成果だけでは捉えられない子どもたちの学びや葛藤、成長の兆しを読み解くことを可能にする。Hicks(1996)の研究が示唆するように、質的研究の方法である談話研究やマイクロエスノグラフィーを用いることで、これまで「学力低位」や「危機に面した子」と認識されていた子どもたちの中に、実は豊かで意味のある学びが存在することが明らかとなる。この視点を持つことで、教師は、子どもたちを「見くびる」ことなく、また「できて当然」とすることもなく、ありのままの姿で捉えることができる。

この「教育的鑑識眼」をさらに深めるものが、教師の「アドボカシー」の視点である。アドボカシーとは、教師が子ども一人ひとりの声なき声に耳を傾け、その意見や権利を尊重し、学びのプロセスを擁護する態度である（堀, 2024）。堀やHicksの知見を踏まえ、筆者は「教育的鑑識眼」と「アドボカシー」は互いに補完し合う関係にあると考える。すなわち、「教育的鑑識眼」が子どもの内的な学びを看取する力だとすれば、「アドボカシー」はその学びを社会的・制度的な次元で支える力である。教師がこの視点を持つことで、子どもを単なる「評価されるべき存在」としてではなく、「尊重されるべき主体」として捉えることができるだろう。

このような「教育的鑑識眼」や「アドボカシー」といった「見る」力は、天賦の才ではなく、実践と省察を通して磨かれる専門性である。この専門性を教師が組織的に向上させる上で、「授業研究」は極めて有効な手段となる。授業研究は、教師が互いの授業を観察し、子どもの学びのプロセスを深く議論する協同的な実践である。このプロセスを通じて、教師は自身の「教育的鑑識眼」を客観的に見つめ直し、他者の視点を取り入れることで、子どもの声なき声に耳を傾ける感性を研ぎ澄ますことができる。この実践こそが、新自由主義的な価値観に安易に流されることなく、教育の本質的な価値を再構築するための重要な一歩となる。

## 5. 教える—教えられる関係性の変革:「学びのコーディネーター」としての教師

新自由主義的な教育潮流に抗し、子どもたちが自分らしく学べる教室を築くためには、教師と子どもの関係性を、従来の「教える者—教えられる者」という一方向的な構図から根本的に転換する必要がある。その転換の鍵は、教師を「知識の伝達者」としてではなく、「学びのコーディネーター」として再定義する点にある。佐藤学の提唱する「学びの共同体」では、教師は「聴く」「つなぐ」「もどす」という三つの実践を通して、子どもの学びを支える存在として位置づけられている（佐藤, 2006）。本稿では、この理念および佐藤の実践的言説に依拠し、「学びのコーディネーター」としての教師の役割を以下の三点に整理する。

1. 聴く：教師は、子どもたちの発言や活動の背後にある思考、感情、問いを深く聴き取る。

具体的には、子どもたちの「わからない」という声に耳を傾け、学びがどこで停滞し、どこで深まっているかを判断する。

2. つなぐ：子どもたちの多様な思考や意見を繋ぎ合わせ、相互に探究し合う場を創出する。探究は本質的に協同的な営みであり、個人で行うには困難が伴う。教師は、知識を教えるのではなく、子ども同士の学びが豊かになるように、対話や協同的な活動を設計・支援する。この実践において、男女混合の4人1組といった小グループは、学びへの強制力を持ち、聴き合いを促す上で最も望ましい形態となる。
3. もどす：子どもたちの学びのプロセスを問いかけとして子どもたちに戻し、自分自身の学びを深く省察する機会を提供する。例えば、「え、それってどういうこと？」「本当にそうかな？」といった問いを投げかけることで、教師は子どもたちの考えにワークッションを置き、進行のベクトルを深化へと向ける。

このような関係性の変革は、教室における権力関係を希薄化させる上で不可欠である。教師が一方的に知識を授与する権威ではなく、学びのプロセスを支援する伴走者となることで、子どもたちは安心して「わからない」と表明できるようになる。この「わからない」の表出こそが、学びの協同的な探究の出発点となるのである。

この変革を可能にする具体的な実践の一つが、佐藤学を中心とした「学びの共同体」の授業デザインである（佐藤，2023）。特に、教室全体が「わからない」状況に直面する「ジャンプの課題」は、正解主義から脱却する上で有効な戦略となる。この課題は、ヴィゴツキーが提唱した「発達の最近接領域（Zone of Proximal Development）」に位置づけられる問いであり、子どもが自力では解決できないが、他者（教師や仲間）の援助があれば解決できるような、少し難しい課題である。この課題に取り組むとき、子どもたちは個々で孤立するのではなく、互いに協力し合い、探究する必然性が生まれる。この場面において、教師は「学びのコーディネーター」として、子どもたちの対話を聴き、思考をつなぎ、内省を促すことで、全員が学びのプロセスに包摂される「誰も一人にしない」教室を実現するのである。

## 6. まとめと展望：新自由主義を超えて

本稿は、新自由主義がもたらす「正解主義の教室」が、学びから内面的な豊かさを奪うという問題提起から始まった。そして、この潮流に抗うための教師の専門性として、「教育的鑑識眼」「アドボカシー」「学びのコーディネーター」という三つの概念の重要性を論じた。

筆者は、これらの専門性を、パウロ・フレイレが『被抑圧者の教育学』で批判した「銀行預金型教育」を乗り越え、「問題解決型教育」を実践するための不可欠な要素であると考えた。新自由主義下の教育は、知識を一方的に注入する「銀行預金型」の側面を強め、子どもから問いを立てる力や批判的思考力を奪う危険性を孕んでいると言えはしないだろうか（フレイレ，2011）。

これに対し、本稿が提示した教師の役割は、子どもたちと共に現実の課題を探究し、その解決策を協同的に見出す「対話」の場を創出することである。これは、フレイレの説く「対話による解放の教育」を体現する教師の在り方を示している。教師が自身の専門職としての

尊厳を再構築し、子どもたちの学びと人生を創造する主体性を育むこと。この実践を通して、学校は単なる「人材育成」の場ではなく、「誰もが人間らしく生きるための学びの場」へと変革されるだろう。この変革は、子どもたちの未来を守ると同時に、教育の本質的な価値を社会全体に問い直す重要な一歩となるのではないだろうか。

## 参考文献

- ・E・W・アイズナー著 池田吏志・小松佳代子訳  
『啓発された眼-教育的鑑識眼と教育批評』 新曜社 2024年
- ・パウロ・フレイレ著 三砂ちづる訳『被抑圧者の教育学-新訳』 亜紀書房 2011年
- ・Hicks, D. (1996). *Contextual inquiries: A discourse-oriented study of classroom learning*. In D. Hicks (Ed.), *Discourse, learning, and schooling* (pp.104-141). Cambridge University Press.
- ・堀正嗣『子どもアドボカシーの基本原則—子ども主導の意見形成・表明・実現のために』 明石書店 2024年
- ・経済産業省 (2019) 『「未来の教室」とEdTech研究会 第2次提言』 経済産業省  
[https://www.meti.go.jp/shingikai/mono\\_info\\_service/mirai\\_kyoshitsu/pdf/20190625\\_report\\_gaiyo.pdf](https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/mirai_kyoshitsu/pdf/20190625_report_gaiyo.pdf)
- ・Kerssens, N. (2024). *(Micro)soft power in Dutch public education: Making classrooms platform-ready through partner work*. *Critical Studies in Education*. <https://doi.org/10.1080/17508487.2024.2428808>
- ・Manolev, J., Sullivan, A., & Tippett, N. (2024). *Reshaping school discipline with metrics: An examination of teachers' disciplinary practices with ClassDojo*. *British Journal of Sociology of Education*, 45(7-8), 1146-1160. <https://doi.org/10.1080/01425692.2024.2407874>
- ・Noula, I., & Govaris, C. (2018). *Neoliberalism and Pedagogical Practices of Alienation: A Case Study Research on the Integrated Curriculum in Greek Primary Education*. *British Journal of Educational Studies*, 66(2), 203-224. <https://doi.org/10.1080/00071005.2017.1314446>
- ・佐藤学『教育方法学』 岩波書店 1996年
- ・佐藤学『学校の挑戦—学びの共同体を作る』 小学館 2006年
- ・佐藤学『第四次産業革命と教育の未来—ポストコロナ時代のICT教育』 岩波書店 2021年
- ・佐藤学『新版 学校を改革する—学びの共同体の構想と実践』 岩波書店 2023年
- ・佐藤学『教育史像の脱構築—近代化言説の系譜学』 世織書房 2025年
- ・Sellar, S. (2014). *A feel for numbers: Affect, data and education policy*. *Critical Studies in Education*, 56(1), 131-146. <http://dx.doi.org/10.1080/17508487.2015.981198>
- ・高田一宏『新自由主義と教育改革—大阪から問う』 岩波新書 2024年